南總里見八犬傳

第九輯 巻二十三至二十八
第十至三十二

馬琴自筆校正本

里見八犬傳 第九輯 卷廿之

特4曾イ
600
265

600
265

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五

東都　曲亭主人編次

第百三十四回

苛子の海中ゆ與保千金を捞ふ　蕃山の窮難ゑ照文一將ゆ逢ふ

復説犬江親兵衛い舟覆りて水底ゆ喪れる金子と名刀と惜めども甲斐ゑ〜ゆ代四郎それを慰めて甘ゑ術ありとて像輒ゆ二さび海へ投りーよりいふくと思難て單扁舟に操りて岸へい寄らで在りける程ゆ姑且て代四郎い波濤を披けて忽然と扁舟の邊ゆ浮出て両ゆふ捧げ一箇の絹を舟へ撞扎哩と投入るとそれが是別物ゑ〜び失る那金ゑければ親兵衛狹びゆ堪ぎて楫を出て代四郎ゆ推りせまくもある程ゆ代四郎ゑ舷ゆ掛けゆりて舟ゆ乗りて耳を傾けそちち敲く鼻に緻りて水と出て一霎時呼吸と定めて腰ゆ跨る大小の刀と一口親兵衛ゆ遞與きとれい是も亦紛ぐもあらじりけり小月形るければ親兵衛憶ぎ雀躍ゑて楫を

引抗げ跪て受戴き腰に帶て不測の恩義を感じ已を左の袖もて濡る刀兒を拭ひて
代四郎に向て欽び舒る事。倚伏は糾ふ纏の如く狹今に創め阿曳が泗法六稔麻柴けん戸冏河
曳みづから船を漕て死まく欲せ。阿曳が那命運の顛末は我姫神の示現を豫聞て弥
増せる今の掙に妙なる既に千仞の水底に淪て其首をも知るよしなし。両箇の宝貝を捞り
得ぬ。恙もあらば二度まで咱們が邦助に做られは遁古允恭天皇の十四年秋七月勅詔に
よりて赤石の海なる奇真珠を捞採て命死ける阿波の蜑戸功長邑の男狹磯をも是に傷よ
まあらんやとて感涙笙吒むまでに連々に嘆唱まる程に代四郎は身を拭ひも果ず船の内に脱捨
なる衣と袴も掖よせて身裝ふ然氣なく親兵衛に答るやう。小可嚮は諸君子の意見に恃り
妻に子に秘して身に従ひ罪なきまに死為れども夙念違ぬ。有恃る瀬に逢て身の仇を
報ゆるは思念の外なる幸ひぞ。曩に身の故をもて富山に我を宅眷副六稔を安く過させ
ば伏姫神の神恩德誼は萬分の一をも復まつらぬと思ひ給へば欽び何度か是に加へべ

年ひさしても泗法は今も昔に変らねど畢竟千仞の水底を探りて輒く大金と小月形の名刀さへ
得ぬ當りは我ゆゑ那姫神の真助なるむ。如く百個千個の男狹磯を這里に聚るとも
豈人力もて做し得べきかと折々の所行に誇らぬ誠心を親兵衛ぞ感嘆して今も
那毒茱に中られる我伴當も夫役笛高工們もかの代の心許なく卒先舟を還せべしとの代
四郎然と応て身を起しつ親兵衛に代て楫を操て舊の船に遷に漕寄せ扁舟を繫
住めば親兵衛は代四郎と倶に件の要金と那海賊の頭領の首級を我船に含容く。然而
那這と換まる伴當夫役笛高工毎に仆まて隨ひて死活を知ぬ又衛に親兵衛が難仆
なる五六個の小嘍囉們は脚を折れ或は胸を打脱して嘘に苦む息絶げに饒しぬと諸
殼に叫ぶ枯野の霜に鳴く虫ぞよ。細る可しと親兵衛二度かへ顧て懷に護身
嚢を含ませに内なる火玉の奇特なるべし。主共伯に海に没りに嚢は亳も濡もぜして親兵
衛が着る衣さへ乾て濕ぬ原潮氣の餘波なりけり。當下親兵衛は這霊玉の

護身嚢と額ゐ推當うち念じて。即便復這嚢をとて。仆れる躬方の毎の胸を漏さぬ拷ーゐ。權且と伴當夫役舶公筥高工們。同音ゐ忽地苦と叫び。伶仃ゑ咸舷ゐ身を俄けく。共侶ゐ反吐と衝エ大々ゑ〻ゑ。醴囹子濁酒喫べ。涯り吐盡して。心地清安ふゐり。ゑらゐ甲乙通て我ゐ復りて。親兵衛をそろ。代四郎をそろ。又仆れる。瓜瓜児們をそろ。驚ゑ訝ゐ。見て。甚だ。ゑらゐ。羞て。有繋ゐ。問難と。親兵衛然けそと。微笑て。有賊難箇様々と海賊們が奸計ゐ陷られ。首ゑろ。一千両の要金と。二個の老賊が。竊食て。扁舟ゐ乗て。逃んとしけゐを。親兵衛が。迂携りけ。舟覆りて。難義の折。燒雪代四郎がかゐ。來て。件の賊を討捕ゑ。その支の尾まで。鮮示して。又ゐ。其首仆れ。盗児們。初我船ゐうち入りと。楫ゐ。毆伏ゑ。その餘ゑ。幾名。狡雑輩。搔抓て。洋へ放下ゑ。若們他を。親ゑ。代四郎ゑ。御高ゐ水中ゆく。討捕ゑ。首級を。食ゐ。出て。ゆ。皆愕然と。驚ゑ。悔て。おそるく陳ゑ。ゑう。小可毎本性。愚魯ゆ。口腹と。貪る。為ゐ。御制止と。不ー。ゆゑ。死地ゐ陷ることを

沿知ゑ。命魂既ゐ絶ゆ。ゑりゐ。御武德ゐ憑り。海賊ゐ。びて。這身々々ゐ。恙ゑく。甦生り。洪福ゐ父母ゐ倍も。御恩と。以後と。慎ゑ。ゐ。ゑ。ゐく。饒さ。ゆゑく。と。陪話ゑと。親兵衛ゆゑ。も。否と。我もかゐ。折ゐ。奇く。巧ゐ。謀り。ゑ。騙賊。毎ゐ。無せられて。小心。届ゑ。ゑ。困ゑり。ゐ。若們ゑ。衍。と。五十歩百歩の間のと。倘姥雪の。郤助ゑく。ゐ。我も。亦大洋の底の水屑ゐ。ゑり。ゆべ。正ゐ。是我両舘の天地ゐひとまゐ。年来の。御仁政の餘福ゆく。有。恁ゑ。愉快の勝。ゑられと。這海賊の。処来歴知ゑ。已ゐ。送恨と。素奴們。痛痍ゐ。弱りゐども。尚死ざるゑ。便宜ゑれ。片隅。より。皆。蜂起と。結杠ゑ。拷問せと。ゐ。措揮ゐ。大家勇ゑ。立て。美ゑ。ゑ。心も。果ゑ。船檐ゐ。附ゑ。麻索。ゑ。ゑ。ゐ。抜。ゑ。群立蒐ゑて。弱り。俯ゑ。小嘍囉們。ゑ。引起。一。綁。縛。ゆ。咸檣。ゑ。轂。ゐ。ける。開。ゑ。中ゐ。那舟。經紀。打扮ゑ。両個の。小嘍囉。水。寃。鬼。柄。杉九郎。難渡。破船。二。倶ゐ。両脚を。折れて。起居。ゑ。隨意ゆ。ね。氣力。衰ざりけれ。親兵衛。隨。即。伴當。ゐ。下知て。這両賊。と。最。も。堅。ゑく。責。向せ。ゐ。泳ぎ。具ゐ。招ゑ。ゑ。その。言。ゑ。ゑ。聞く。ゐ。他們の。火家の。両個の。頭領。海龍王。脩羅五郎。今。純友。査。勘

太の出処来歴陀々花酒の事伎倆の顛末這回大江親兵衛们ゞ京師へ赴く船ふ載る金
目かるを吵知りて奪略まく欲れども親兵衛い武勇あり且同船の武士伴當们八九十名あり
といへば他们ゞ火家と對冲せり有恁れ計り易くぎいでもの毎と引分んとそふ段と旋く親
兵衛ゞ這港口ふ歇船まー始より今純友查勘太い小嘍囉五六十名と從て悄地ふ陸地ふ
うち登て箇様々々の計畧と行ひ又海龍王脩羅五郎い十餘名の小嘍囉を相俱く肇
より那里の船ふ在り豫計りーるれば蜑崎十一郎照文ゞ伴當とヨく領て奥郡へと赴く及
ひて开ゞ後ふ跟ひ船より出てもく者も亦尠くねば越ふらく便宜とゐるるの虚ふ乘じて水寇
鬼们い假經紀の討策と仮ひて事十二分ふ做ひるり者ふ反て親兵衛ふ裏と畫れて自他幾名の
火家いゆくと海龍王さへ討捕られて事の発ふ及びようとうち出て又陳まるう但一那蜑崎と
らンと伴引ゞ七开ゞ路ふ埋伏して殺もまく計りー今純友ゞ一覇い造化いふい欲その美い知ぎ
いとふふ親兵衛驚ひて原来今日の賊難い我上ふのこゝぎして亦蜑崎们の前路ふ在り开い

姥雪叟知らるゝ安危什麼とゝ〻れば代四郎笑ひ膝を找めて然びとそのるれ衛門ふ和君ふ
告まく思ひて身單走りかりーかども和君い亦那脩羅五とあら首級のこ茲ふ留わる老賊と水
中ゆ鬪戰の最中ゝれば告るふ暇あゝぞ〻て時後れて六日の菖蒲十日の菊ふ似られども花を
実もあり話説ゝ柳衛門奥郡ゐる城主の家臣と伴て蜑崎生们を誘引ゆる那設良四九二
郎綾丑い実ふその人あふゆゝ他い則海賊の頭領と呼ばるる今純友查勘太ゞも下ゆ鋸鮫五
鬼五郎と喚做る那一隊の小頭領ゝ然れ暇兵ふ打扮て相從ゝる四五名も开ゞ火家ゝ小嘍囉
ゐりけるゝ蜑崎生も我们も知るるりゝ是れ哄詐られ俱ふもくゝと三十餘町樹柱深ふ茅番山あり其ハ
頭の山路ふ入り折跡より来ふ筒工们の内中ふ路の案内を知るるあり忽地聲と呼り立て
刀祢们奥郡へとるゝ路錯ふかゝゆと招ゝ上ゆ假四九二郎の五鬼五郎い省も甞冷笑ひて
他们ゞ何をとく知るゝ我城内へ赴くゆ這山路ゆ提徑ゐれ人々欺れゆるとふふ蜑崎生も小可ゝ
惑ふて敢疑らゆ肩引れてもく程ふ忽地前路の樹間より响馬とゞーゝ豪雄们ゆ覇約五六十

名鰐皮の絨の胴衣に身甲の鉄脛衣して弓脇挾み箭を搭馳い或は竹槍長鉤を引提て
路を横遮りて内中に一個の頭領あり後ふの名を肇て知り曰ふ則別人なり今純友査勘太
郎身材功く虎髭玄く星眼を赫奕して蛮崎生を疾視て若い他郷の乱走兒既に
鈍くも我々が圏套に入りて暁得らで那里へいんとせば盤纏身皮と共に命も這里に差出
さん。十萬億土へ走りねと喰けば衆賊同音に鬨を為り腹を敲て笠前を蜚さと蟲に似たる
勢に當るべうもあらねば蛮崎生も小可も只得刀を引拔て箭を砍拂々々一霎時に敵と拄
ほあらうとの折故意と後れる假四九三郎の五鬼五郎とその隊の小嘍囉と相俱に永做を長
刀に拔晃めて背より咄と嗔て殺んと競ふ前後の賊徒に氣を呑れる躬方の夥兵伴
當伝及那直塚紀三六等防ぎ戦ふ擬勢なり況飲食の輿なのを跟て来ふけ夫役高工
伝い右往左往に逃迷て矢傷刀瘡那這と痛痍を負ぬもあり蛮崎生も小可も免を
かれぬ必死の乱戦樹柱を背に相拄えて透もあば刺錯へんと思へば一歩も退らで力を勠る

覚期の折ろう復忽然と前後の茂林に鯨波大く發りて群立出来る居ヨの軍兵おを其軍
装賊徒に似ぜ但見る右より左より直兜の武者三百名摠大将ともぞ紀へ楊櫨花絨の鎧
戦袍に龍頭の兜の緒を締二十四挿る就鳥羽の征箭笘高に駝做て滋藤の弓を左の脇
挾み右の肩に磨毛と打振々々金作の大刀に皐皮の尻鞘様て聖柄の匕首を挿副大逞しき
桃花馬に雲珠鞍置て優ふ跨る白地に圏藤の家花靡深做る旗一流山風に吹靡非
き。士卒と芦毛る勢ひ群る虎の峯を降て羊を駈るに異ならず馬前に立る勇士猛卒天
地に响く同音尖鋭く若伝大胆無敵の君主賊叨に本郡に徘徊て白晝に前徑を做て孤士民の
愁訴あるに為に緝捕の為に隣尾殿みづから向せ給ひて天羅天網剖兎るべうもなく皆刃に伏せ跪て縄
掛れと吸ら呼る聲共侶に前後より弓を銃を透間なく連放る征箭鏃炮に空笘前空丸あること
なければ然しも猛き武草賊毎矢場に四五名斃る仆されその餘傷を蒙るに數るに遑もあらぬ君軍
賊是に勢ひ折けて乱れ立る癖れ吐嗟とぞうに辟易て蛮崎生と小可の身邊に敵に

さん太
文

代ぢろ
四九二弟
前内
後吉
番山
遺際

るりこゝに教ーさゝ共侶ゐ近つく寄隊を指招ゑて是ハ他郷の旅客也。蛮崎照文姥雪與保赤僕約莫五六十名の賊難ゐ路去りゐ及び者也緝捕の人々ゑの意ゑ以く同士撃とるゑゆひそと喚り呼り突然と找を出く敵を擇ゑ逃んとゑる君羊賊を當るゐ儘ーて斫仆せゑ初逃る伴當覇兵公高士夫役们も力ゑ及ばけ招ゑれ共もかゑ来て帮助ゑるーも見るゆ有徒ー程ゐ賊徒の頭領今純友査勘太ハ蓑毛の像くゐ折撓くゐ矢傷銃瘡ゑとめもせず逃る衆賊を罵奬ーて兵毎蓬ー今爰也。露の命を免ゑとも百手千戴ゐよも生ゑ死れやゝと聲吸酒ーて三尺有餘の血刀ゑ振り打ゆる奮毅ゑ突戰阿脩羅の鬼ゑも恁やゆゝ三悪道ゐ秀ゑる賊首ゑれも武芸熟ゑ男力一人當千ゑけれ緝捕の士卒ゑ多ゑ共ゑ遠囲ゆーるゑ敢近つく兵ゑゆーと蛮崎生衛と寄せて白打のゑゑと投ゑとせーゐ査勘太ゑ透ゑ毛刃を捨て四ゑゐ豆ゆて被組ゑる査勘太贅力ハ勝れも數人所の痛痍ゐ如意ゑゑ推ゆ推れゆ挑む程ゐ那四九二郎の五鬼五郎が返ー合ゆ今純友を幇助て蛮崎生を刺んゑ既ゐ走ゑ近つゑ小可を遮ゆ止めて五鬼と

刃と交ゑ一上一下と戰ゐゆ當下那方ゑ査勘太ハ痍肩ゐくれども腕剛ゑ先竟ゑゐ煽煉ゆけれ遂ゐ蛮崎生を組伏せ腰ゑ短刀抜出ー首を掻んとゑる折紀二六迴ゐ旱ゑを飛ぶ像くゐ走り来ゆ背ゆりーて査勘太の頭髪を抓て弯仆せゑ蛮崎躯て反復ーて主僕両個で辛くゑて厭生て索を撤ゐけり然ゑ這方ゑ五鬼五郎ハ今面前ゐ査勘太ゑ捕捕ゆをえてーゆ魂忽地天外ゑ飛ゑ失け腕乱れて受太刀ゐのゑゆーゑ小可ゑゆと踏入で肩尖托地と斫仆ーて起ーも立ゑ登ー蒐て刀の緒ゆりて失ゑと結杙ゆ折ゆ射方の覇兵ゑ両三個逐ー束て索を合ゆ牽立ゆゑの餘の草賊五六十名大槊ハ隣尾殿の勇士猛卒ゑ駈逼ゑれて或ハ殺ゑ捕られ或ハ俘囚ゐゆゑ捕捉ゑ支果て大將隣尾伊近主ハ隊兵を聚合ゆ坦る結縷草地ゐ聳児を建ゑて首級実検とゑゐ折蛮崎生と小可ハ捕捕ゑる賊徒の頭領今純友査勘太と鋸鮫五鬼五郎と覇兵ゐ牽ー伴當を拉て左右ゐ就て本貫姓名來意厄難の支の趣を愬て両個の生拘を解きーゑ隣尾殿對面ゆゆ戰労を

慰め功を誉て宣ふ。和殿們異兵の家臣なれば我が其縁あるに似る。然れ今料らずも急難救
拯ひ給へ。草賊送るくるまに入りて過世ありてのち。そを後に解示さん。近曽西海山陽北海
賊毎遠く東海に免れ来て這頭の諸浦に船を歌め時々陸にうち登り。旅客を屠り。浪人
うち入り害を做すヨリ。と呼ぶ。小る四国の残賊なる今純友査勘太と喚ばる。下れ小嘍囉
五六十名を従へて五六日已前より。這蕃山に躯居るより。今朝も土民の密訴あり。是ゆゑ先間
諜児を遣して。その虚実を探せしに果して違ざりければ。開と摘捕せん與に我が隊兵三百名を
従へて悄やかに城を出て。先這蕃山を捕囲せ。山路にうち入り渉猟るに各難義の折ゆゑ。
只その一挙に草賊の根を断ぬるに各のよく賊徒を相拄えて。時を移さずよりて賞をべし。と
誉て且我歌船を一事の仔細と海賊們が仮倆の顛末を問勘へて。然而隊兵に吩咐て生捕の
草賊に拷問の笞を加えさせられに。今純友が呵責に撓まず。始め首伏せざりしかども五鬼五郎
們以下の小嘍囉に苦痛に堪ず支迷もなく。招状を及びぬ。他們が出処姓名綽號もその

折に正可と知れ。今純友査勘太に這一件の頭領なる。又鋸鮫五鬼五郎に開が小頭領なる草賊
なりとの。餘海龍王脩羅五郎の事及那一件の小頭領に水冤鬼柄杓九郎灘渡破船二と
喚做まり。又海瘋龜正覚坊。橋毛船沼受太郎鍼千本河豚六寄鯨土左衛門潮冠品
九郎と呼名あるに下に草賊なり。但小判鮫吸四郎棘鬣鼠四郎。亀八坂間田沙智七
龍宮鶏魚太郎と喚做る四個の草賊に今純友が隊下なる名ある小頭領なり。逃や亡けん。
らぎとに渉猟れど屍骸にあらざりけり。只その六名のみ這回他們が仮倆の顛末當家里見の
船に載る金子を奪略んと欲ずに同船の従者ヨリ。更に假箱を造りて我當黒を大
平引分け。陸るに今純友に従ふ小頭領小嘍囉甲乙倶に五六十名這里に埋伏して結果け。船を
るに海龍王們。陀々花の計策にて。敷さんと豫准備の支まで。都て招了ぬ。それば小可これに
驚愕憂いて。小らに己が身の上最殆しと。尼くに小可を。船に遣さ。及身の安泥や否を見るべく。
這方のなども報知せんぞと。談れば蜃崎生沈吟して。大江に大智大勇に縦那海賊們ぞ。謀

まべを酒飯の為に陷れて命を喪べくもあらば遽莫這方の賊難とも報知せば小心の與に宜しからむとらふと隣尾殿うち受てその大江と甚麻るるのぞと問れて蛮崎生恁らと己身が世に儔稀る勇武智畧功名の事の顛末を鮮亶せば隣尾殿駭然と貌を更め嘆賞して亦奇しく後生を哀れむ心許るく名兄狼狽れ我が漏たる草賊と渉猟らせて捕へ馬頭に対面せと疾くとい宜ぶと蛮崎生が左右るく立ち御意辱くしけれども在下の不測の御救助を必死を免れひ捕漏さたる草賊と捨て退るが義にあらず大江るが代四郎と一個遣べ事足なん那里に異変あるも既に時後れるべき勢もその甲斐なきにべ召置るべうのそと辞ずくに曾義に勇むに隣尾殿いと感ぜ恁思れるべ左も右も隨意なと勿論るべ為に姥雪とあら馬頭に退らべその大江とらに後生に我が意と宜く伺へよ捕捉果べ日に暮るとも必ずて対面せあらんそと懇切る指揮に小可再議に及べ身の暇とあるとて走りかのひとに報る詞の長潮も清に心に委ねる水と陸地の災祥安危に親兵衛耳と敬せて或に驚に或に喜び听果て憶に太息と吻に額と拊て一方に

今日の禍鬼這里に阿嗄の帮助あり又陸地に伊近主の緝捕の隊配合期て兇賊一時誅伏の欲びに就て思に是も亦我姫神の引接冥助の神力にその人を為て危に臨て安に居其大功を論へば刑部の蕃山に賊の小頭領五鬼五郎と搦捕る後に大洋に波濤を潜て海龍王を討捕て咱們を極て千尋の底る千金と名刀と輒くも捞り得る何嗄と第一とも第の次の不知案内る山路に衆賊に不意と駭れて亂箭に身を傷れも那草賊の頭領と少え今純友を搦捕て武勇と這地の城主に知れ蛮崎生に優と者る只徒有て功に咱們が不覚面伏と今あと諦せ我慢心に大士の中逸早く両館に見参て富山に老侯の危殆を拯ひなり又上總る館山に反賊莫蚤田素藤を一度る二度生拘て君の乞與に毒蟲毒と甘拂ひ又武蔵の忍岡に政木大全と相伴て賢と薦る忠信を虐せ両國河原に石亀屋次圓大们の危を解く大田川の與に其舊交に代る又下總る左右河原に大庵主の禍鬼を陡に駭る走て義烈院殿の御送骨と敵の為に喪ざる約莫這六大功に我に及者るとの情地にみづから屑

ミハ既に天狗の痛るを人ハ賢とる不肖とる泊るあり泊ざるあり故に孔聖人も耕作技ハ
者も老圃に不如といふけり然び虎狼の猛るも水に没ては細鱗ふも及ぶ又白龍の魚服なる
とハ余且の網を免れるかり這古語疇も言ハいへども機に莅々已と知り敵と知る心の倒に
困るハ仁が今日の不覚の如し我義兄弟都て七人孝義忠信世に稀る年来流浪の艱苦を
喫て仇を報る悪と懲し。毛野道節大角三犬をいふ。或ハ又貪婪なる伯母に仕へ孝順愛さ。よく亡父の志と義嗣て
忘るとなき。信乃を。或ハ毒悪なる東人の與に怨を復ふ。寃家の為に誣られて罪なき罪人に
做らるも志と改ず。莊介。或ハ亦友の與に老妖故怪を顕し。那人の親の灵を慰めと云。或ハ又奸臣に
抑留せられてみづから防ぎ亦暴牛と推駐めて。聚合一千百の老幼男女を一個も傷らせずけるなり。小文松
吾を。我親兵衛が時運に乗じと名君武徳の驥尾に附る軍功の類に孰も学び易ふ思を
よく思ひて我ふに賢達と懲されけるに姫神の神謨に扶と心ひていま日まで井蛙の淺見自
恣放言人もなげる挙止のさぞるあり心裏恥じ我徳と爭何ぞ曩に水路に赴く折大飼と

小父大田が教諭を受ふ思合じと後悔を啞るの。姫神いで饒さぞ君子い必ず獨を慎
むとかい古語を胆に銘じて忘るべからずと常と合て天をうち仰ぐ。怜悧けれども童子の情態
然しも九歳の性美しを代四郎感じ且慰めて。然る不娯なひ七孟氏の語に君子とハ欺くべ。陷るべ
らずとかい一ハ身の上に似ずよくその方とのそまれば仁人君子もいふまで欺れざるとかいんその欺を信ふ
と漫に陷らず衆賊と矢場に敵に仆て海龍王を廷禁ゆし。斗と行ずとふ死やまれども身の
みづから非とて。衍ず飾ることを老実心に浮薄人の鍼砭を恁ハ孔子に語道に似て鳥滸がましく愚べけ
れど。語ハいふぞ君子の過ハ日月の蝕の如し過ることを人それを仰ぐ改ることを人それを仰ぐといい一ハ身の
戴悔同じと有ることを謙遜られども其頭今の志務に小可蕃山に走り復と蛍崎生も隣
尾殿に這里の盗難箇様ふと一ハ身軍に對治せられ事の首尾と報知ふ隣尾殿に對
面の折詞をヨヌく費さで便り宜しいとふに親兵衛黠頭にてその弟便利の計られども老人を
幾番。脚疲らせ心ぞ伴當とて遣せべけれと辞ふ代四郎安あ否別人でい不便と小可走一

走ゐて來て准備をせるべしと詞せうに老兵の性忠れい疲労と數ぎ船より出て艤板と渡りて蕃山へいそぎけり。小程ゐ犬江親兵衛い衣裳を更め准備を整へ伴當両三名ゐ吟咐て陸ゐ登り眺望見ゐ出て。隣尾判官伊近の浦巡りと為程ゐ秋の日ゑれと尚處暑の節ゐあれば短くも沿景ゐ既ゐ没きて。下晡より時候出ー伴當走りかゝて。隣尾殿の來ゐ給這里を距ゐ遠く遠くぞと報るゐ親兵衛領ゐて若黨両個と従て奴隷ゐ鎗柳箱圓坐草履を執すゝ馬頭ゐ出て迎る程ゐ隣尾判官伊近ゐ従兵を比皆後陣ゐ住め。一百許の究竟ゐ士を率ゐ前後左右ゐ立ーる。馬上優ゐ路次とゝゐ既ゐ近つく真先ゐ照文主侯姥雪代四郎夥兵ゐの餘も悉ゐ船の案内ゐ倶せられ。金瘡児ゐ後輿ゐ早無せられ。迫後方ゐ従ひけり。當下照文と代四郎い歩を早めて親兵衛ゐ近づき。ゐる程ゐ伊近馬より下立て。瘡児ゐ尻ぞうち撫れば居ヨの土卒左右ゐ別れて。斉整として蹲居ゐ。偖而犬江親兵衛い恭く判官の身邊ゐ找ゐ近つき。名告ゐ。見參を登時伊近發見ゐ放て。安房の勇臣犬江生料らずゐ對面ゐ今日ーゐ和殿

們三勇士の武勇ゐよりて我隊兵を多く労ゐ及ぼーて。水陸二不所の巨盗梵賊いゐ一旦逃亡る草賊四名。小判鮫吸四郎。棘髭鼠。元竜八坂間田沙智七龍宮鷄魚太郎と狡猾做ゐも追捕の網ゐ免れず。方僅都てゐ入ゐ。愚ゐ愉快とゐ。但憾ゐ蛮崎の從者ゐ二十餘個の金瘡児ゐ。我隊ゐ醫師を倶ーられば亟ゐ療類を加へ。孰も幸ゐ浅痍ゐて。所ゐ居れば安ーと云ゐ。尚淹留を數れば。城内ゐ頗ゐて平愈ゐ折ゐ返さべ。ゐの弟什麿と懇切ゐ問れて。親兵衛何とぞ謹て答ゐ。最過分ゐ御懇命忝ゐ弟ゐ。去向を急ぎゐ金瘡児們も船ゐ載く。自療を施ーいゐ。在下神伯經驗の良薬の貯ゐゐの弟御ゐ安ゐ。今日の一舉い同船ゐる。蛮崎照文姥雪與保他們ゐ寸功いゐ在下い小嗤囉を才ゐ對治ゐるゐ。反て與保ゐ極ゐて。死ざるとゐ沿て。ゐ畢竟照文與保も御武德ゐ憑ゐ九死を出て一生を沿れば。ゐ驥附の微功ゐいゐけゐ。开を御寝賞ゐ倒ゐ當ゐ。ゐゐと辭ゐ伊近主ゐ。ゐ否然ゐ。ゐ和殿ゐ船の挿ゐ一人當千とゐ。ゐ那水中の組數ゐ。瑕ゐ疵と做ゐ足ゐ。偖ゐ良家臣を

ヨヌく持れ里見殿の果報を羨ましけれ徒らに懇態する。烏滸の舊話に似たれども。我曾祖渥美の郡領隣尾太夫信近は南朝の忠臣を。將軍の宮宗尊親王遠江なる井の城に御坐ましし時。彼三の丸殿方へければ。新田里見の人々と然しも舊交ありしかば南北両朝廷御和親ゝ後已とゝなるを。足利家に隨從して本領安堵の今に至れり。然れば今日各に料らずも對面の有數に昔を偲れて。空谷跫音の思ひあり。いざ我各〳〵感状を餽らまく欲ゝ。他家の臣子又然る賞書を取まゝい。彼礼なれども。舊好あれば。饒れやせん。後の證据にもなるべしとゝ。親兵衛の後方に佇ち。代四郎怡ぎ找ゝ出で。御諚忝くいへども。餘人は知ぎ小可いに大山道節が舊僕を。大江親兵衛は妹母兼ねに因ゝいと遠由縁とりて。思ひけるに。里見殿に召出されて。愁に侍品數まへられいへば。恁ばら重ねて恩義なるを。然いると他家の感状を賜りて何にせんその義に饒さぬ。と推辭を照文傍より。袂を掖て制ども。代四郎い尚憚らで思ひの隨に咳く程に。伊近勃然と面色変りてらんとゝ。いざぎて。思ひ入ゝ。ちち領ぎて。適ぬるを直言するを世に忠臣なる者い誰も恁てそあるべれ。

兼ねに因る

開と知ざるにあらねども。武功と只顧愛るの故に実る思ひの足ざるをれば。各ちろもる棋けに因てたのぎ義ハ剛にて何まれ所要あるをば。有司に命じて亟に辨ちて切て報いにせまほしけれ望ぬるを。と問れて親兵衛然いに安房に住る義兄弟们に今日の一義を告知せるべ後の便宜にいへども。這頭に央なる海艦一艘もいらぎ。ん威德にはよりてこの船を速に央ぬべ安房へ遣いむと。請ふと伊近手ちぬ空でそちと易ぬるに。有司に命じて甲夜の間に我ぬ船を遣さ快消息を調べよと応ぬ天をうち仰ぎて。日景い既に没果ぬ送憾ゝく思ども。今いも是まで遷さぬも又船城寄せく。訪れんとを祈るのと。別を示して照文と代四郎にも叮寧る。詞を被て慰ぬ。その間に親兵衛い水際に住る伴當を招ぎ大家にろぬて。牽居ける生拘の海賊柄枚九郎破船二首を。甲乙都て七八個の素含縮て牽ゆて寄れば。隣尾家の兵頭錦織機馬。黠兵を從へ隊より出く。親兵衛に對面して。その武功と。誉るを當下親兵衛い那捕捉の速るを。快びをの舒て海龍王脩羅五郎の首級を含る出て生拘と共に卒を機馬に鮮せば。機馬い黠兵に

ヨヌく持れ里見殿の果報そ羨ケれ恁らぬ懇態る。烏滸の舊話ふ似れども。我曽祖渥美の郡領隣尾太夫信近ハ南朝の忠臣そ。將軍の宮宗尊親王遠江る井の城ふ御坐ま時。彼この刻躬方入けれ。新田里見の人々と然しも舊交ふあるべきふ南北両朝廷御和親ハ後已とそ。足利家ふ隨従て。本領安堵の今ふ至れり。然れ今日各ふ料らぬも對面有難ふ昔と恩れて。空谷跫音の思ひあり。我各へ感状を餽らまく欲ス。他家の臣子人然る賞書を取ら

ぎ。と問れて親兵衛然ハいふ。安房ふ住る義兄弟们ふ今日の一義を告知せるべ後の便宜ふ

受捕へて。艇て後陣に退く程。その主判官伊近に馬に跨り隊兵を率て。歸城の路次をぞいそぐ。せけ。徒て又錦織ゞ同僚なりける田作岳四郎と喚做す兵頭ゞ。雜兵五六十名に照文が伴當駕兵支役笛工毎の痩を肩ゑと。早て後陣より出て來る。親兵衛並に照文に君命を傳へ雜兵に吩咐て金瘡児を船に載果て。然而親兵衛们に再會と契りて又隊の兵を領て。奥郡の城へ退りけ。小程に親兵衛い照文代四郎と共侶に恙なく駕兵自他の伴當とをゞ立て船に還る。一日も腰と放さずけ。某竜どもに啓くに。則是別剤なり。伏姫傳授の神藥。隨即是を一撮して臥る金瘡児の瘡口へ一個も洩なく飾撒。布めて痩を楚と締ひて。更に又件の某を水に攪建て飲ます。神某の即效先度に異なるゞ。金瘡児们い推並て疼痛立地に退て心地清安に成りけり。その折る日い暮て。船の間毎に燈燭を點す程に親兵衛い照文と代四郎に談ることう。阿叟い量表に我船に躱れて同行の本意を遂い素是忠義の與なれども。その義を願ひて。次心に他郷へ走りに外なるべくいあるべくゞ。然るに今日料らずも水陸二方所の武功あり。その義を

我小父と義兄弟犬田大山に報知て。這功をもて那罪償んと乞禀さば。有司の後に咎の愆と誅せ。恩免疑ひなるべ。と思ふ。よりて隣尾殿に海艦を借りなん。疾消息を書寫せ。件の艦に乗りゞ。と解れて代四郎に鈌びに。照文に諾ひて然べ。咱们ものせんぎとく。倶に燈下に筆を把く。とも准備整ひぬ。親兵衛い又照文に向ひて。這使价に和殿の若黨紀二六を借りて他い郷に和殿と俱に今純友査勘太と捌捕る事由を我消息に戴へば。其賞なくいあるべくゞ。且自餘の大士们に這方のを向れん折答詳る者い他ゞ外に誰りもん。その義を羨引のんや。と請れて照文異議もなく。開い紀二六が幸る。他るべくとの使价に相応かるべ。と思ひども。和殿の隨意せざるんや。と答て艇て紀二六を召て恁々と吩咐れば。紀二六然氣色なく。小可這回の死伴に達ゞ。今中途に本國へ返されんに。本意にいざ既に今日の賊難。と思へば前路も心許なく。いでその死使を餘人に仰付さるも小可い那國までも。死伴を願ひけ。と。推辭むを照文に。開を最互に了簡に汝が伴に達ぎも。大江姥雪共侶に駕兵伴當に

く領て。ゆく旅なれば事虧けぢ。何なる危なるあらんや。あの美は我心ひとりそ。汝ぬ課まるとる思ひを大江主ぬ擇れられ。此上なる面目なるべしと諭せば又親兵衛も云云と慰めそ。照文と兵侶ぬ書翰を遞與し。口状を陳示し。心利る奴隷を俱して。今宵發船をせよかと。とりそぎ立れば。紀二六も只得書翰を受とり。急て両個の奴隷と共侶ぬ准備して。別船をもち程ぬ鱗尾の有司の下知ぬよりそ。安房へ赴く海艦一艘那里の浦より漕ぬて来る。恁と親兵衛ぬ報よけり。件の船ぬ船室領の雑色両個と隷られて。究竟の篙工梶師七八個あり。登時親兵衛ぬ照文と俱ぬ舳頭ぬ出る。来ぬる件の卑下人を労へ。其篙工梶師們皆ぬ安房へ赴ぬ目今と順風なれ。暁方ぬ風易りやせんかそせのへと。催促ぬ。尓程ぬ直塚紀二六も照文親兵衛代四郎們以下の夥兵伴當ぬ。凜く別を告て両個の奴隷を従へ。件の船ぬ乗移れば。篙工們ぬ艇て帆を揚て。安房を投てそ。兄與震別路越ぬ杳る。恁而次の日の暁方ぬ風ぬ猛可ぬ吹易りて。西へ赴くぬ宜しと。里見の艅ぬ公篙工毎ぬ罵りて。船を出ぬ二十餘個の金瘡兒們ぬ。絶へぬ一夜ぬ蒼口愈く立掙ぬ障りなれば。

夥兵伴當篙工夫役們ぬ一個も缺る者あらぢ。神芽の奇效勇士の武德憑しかりもとぬふるなれば。人皆勇む棹の歌謌ひ連る。旦開船ぬ。船も發くや波の花の八重の潮路の蒼海原を。風ぬ儘して走る。往方ぬ遥なり。

第百二十五回　渥美浦ぬ便船紀二六を送る　管領郎ぬ禍鬼親兵衛を抑む

却説直塚紀二六們。安房へかの彷央船ぬ両三日の程ぬして。平群の沖崎ぬ来よければ。則あの浦ぬ船を歇めて。奥郡より隷られる船室領の雑色を。船ぬ残して。そぞ伏ぬかの去るを。饒さぢ然而紀二六も。両個の奴隷を伴て。瀧田の城へ。かの来る。七大士們ぬ來意を告て。親兵衛と照文の書翰を。合る出て遞與ぬければ。小文吾荘公信乃も野道節現八も大角も。初へ訝り中り驚ぬ後へ相欺びて。俱ぬその書を開ぬる。又紀二六を喚よせて。其事の顛末を。猶詳ぬうち听くぬ代四郎が這回の武功実ぬ意外の掙ぬ。いと欺びまもく感して。一霎時も閣ぢ奴隷を

文化遺産オンライン

り。先音音と妙真を招ぎよせる。開ぎ程。照文の宿所へ。紀二六をかへし遣せば。莊介も共
侶ふそ遽しく出て見けり。然ば八犬士の内。中莊介。蛋崎の舊族。ふるさとの照文の宅。眷々
敢忌とうく出迎へて。主ふ莊介。紀二六と。俱ふ那地の椿事を告て。蕃山の賊難。箇様々々
と。照文が武功。紀二六が忠戰。都て親兵衛が消息ふ。おとなる趣を。有つる隨ふ解示まかの折
主ふ助勢。して。今。純友と生拘りつる。紀二六。あれば言漏るべくもあらぬを。照文の妻。ら。聞て驚ぎつつ。亦
歎ぶ程ふ。老侯の近習。けり。小湊目。東峰萌三。宅地。瀧田の城内ふ在り。且その職掌。照文の
下。れば親しくもあり。庇ゆも寄る。留守の安否を訪んとて。連立て来ふければ。莊介。写て。そ。
折。我も對面。べけれ。そ。軈て坐席ふ請。迎へて。先老侯の安否を。諮。り。然而親兵衛が。注進の
事の趣。徒々。る。紀。其。示して。その消息を讀。つ。尚懐を。搔撈て。畏畳帝の間。ら。照文
が他。ふ寄せる。書翰を。出して。遞與。る。目萌三。思ひけるく。這言。那書を見て。奇也
奇也と。感嘆。登時莊介。聲を低めて。かる。亨を這。処。談。るい。礼。る。言。公ふ似て。公

ふ。秘事ふ。ば。禀試。ば。曩。姥。代四郎が。疎忽の便。船。越度。る。老侯の御
仁慈。反て。他が面目。ふ。り。と。他。ば。今。番親兵衛が。消息ふ。代四郎が。請。て。船ふ
附。る。衍。ば。這大功。と。て。償。ば。計。ば。今。聞。消
息ふ。在。這願言。今。ふ。要。ば。似。代四郎が。那大功。禀上。べ。各ふ。任。
悄地。ふ。え。上。ば。憑。目萌三。共。倡。點頭。て。開。蛋崎主の書翰。具ふ。載。ば。
れ。答。軈。て。主人の妻。紀二六。ふ。告別。て。君所。
め。我。伴。當。宿所。ば。来。ば。妙真音音。六大士。譚。て。莊介。紀二六。倡。這里ふ。留
程。既。て。代四郎が。那水陸。一大奇功。及。照文主僕。親兵衛。當。挿。箇様。と。聞。危。
又。安。心。有。歎。慰。れて。憶。時。移。れ。莊介。遽。ば。照文。計。来。て。妙真音音。對
面。自餘。大士。向。て。料。那里。目萌三。来。逢。面談。る。事。趣。徒々。
解示。大家。く。相。欽。開。又。造化。然。御沙汰。

○東京都立中央図書館蔵

答へ別詰に及びて然しも勇士の囲居に詞敵なるべきも紀音音の宿所に退き曳き単節件の首尾を告知せんと身を起せば妙真も共侶に又と求めと呂別して辭て宿所へ退りぬ。小程にして犬士は親兵衛代四郎照文主僕の噂を云へ秋の月の傾くを覚ぬ。語次に小文五郎の母う寔に人の幸ひと幸ふに人力人智に及びがたきを儒者の名つけて天とのたまふ自然の美なるべし。譬ば那政木孝嗣石亀屋次囲太郎三の如き或い武藝或い角觝白打泅法何れとも疎からぬもあり。左右川橋の上に憶ず敵の銃砲に斃れて倶に深淵に陷りぬと云るのみ。最も留ざるに小文五郎と我猶子親兵衛い文武の才幹誉力まで那毎に勝れども泅法に知ざれば那海賊の頭領と云へる脩羅五郎に征伏せられて底の水屑に成べくに其身は不思議に波上に浮出て遂に溺れず且姥雪の幇助ありけり。その機自然の妙契なり。迺天授の共福なりと云へ現に亦犬江が這回の消息に目屬に武藝に勇力とみづから肩を宇宙に敵なりとの思ひ誇りて徒に今と知り難に水路に赴く折犬田大川の教諭格言身に深胆に銘じとへり。亦是人の及ぶ所にあらずとその非を悔て改るとかさ

ねべと云れば大角膝を找めて然に古の聖人にも徒なる故に孔子も亦丘に幸なる過あれば人これを告といへり。又那亞聖なる顔回に過を改ざるを過とへと云へり。世人多くその非を飾て改るに稀なれば大江が賢才千萬人に捷れると知る不足れり然に是に就ても孝嗣次囲太郎三の一期の落命憐むべくと不娯で嗟嘆に堪ずけり。浩処に小溪目東峰崩に出る間をりく悄地に莊介に報る使价来れば犬士們相歎じて聚食て躯てその書を見る衢に内談の一條に悄地に老館に伝え上て御上聞に伺ひ奉りに三士の武功を誉させ給ひて代四郎が為に我が善巧方便の事を異に理りて今にその義を云へば親兵衛も十一郎も然と云まで知らざれば這回の大功を別紙に載れば安房殿へ本文の注進に披露那罪を償んと請るべし。小るも亦幸ひにその義を小文吾と道節と紀二六とやうと相倶に明日に鳳めて稲村へ赴て那里の下知に依るべしとの義に小文吾と道節と紀二六とやうと相倶に明日に鳳めて稲村へ赴て那里の下知に依るべしとの義に目ありて我も亦使をして安房殿に談る旨あり。その義に目ありて我も亦使をして安房殿に談る旨あり。秘よ先犬士們に伝て准

備へんそなせよとある。仰の趣かくの如。因て衢ふせられる犬江の注進別紙と共ふ二通を返しまゐらせる。別紙い披露まゐらせば是老館のあ旨ひ秘まぐくまゐけれど七犬弥心あちあて。今ふ創ぬ老侯の慈恩佛菩薩ふ勝りあるる。実ふるくしく。と稱て悄めたあるけ。有徒ー程ふ荘介い遽ーく美書をあ件の使を還しる。更ふ一個の奴隷をとりて紀二六を召よせて明日い夙ふ稲村へ倶ゐ行ぬ事の趣と洲崎ふ歌めりと申える。奥郡の央船を今宵稲村へ程近ぬ港口へ移ーて待ー置くべ。館のあ下知あるる折便利る為れば。言送ふ鮮ふせば。紀二六ふあらるる果てのそて洲崎へ赴けり。有徒る折ふ妙真音音貝ふ心ふかる君所の沙汰を什麼と思へば落つぐ。三さび出て来ふければ犬士仏い事徒くと老侯の慈恩至妙の便宜を告ふ歎べ両個の老女い感涙坐ふ找むと覚ぬ左ゆも右ゆも幸ヨヌ侯君の恩恵を俯て思ひ仰げば高ぬ清澄山も。ふれめられとぬ稱ける。徒而次の日の暁方ふ道節と小文吾い出仕の衣裳を整く紀二六を倶。伴賞ふて稲村の城ふ赴くふ紀二六ふ宿望ふ更ふ京師へ赴ぬく。照文仏と安危と共ふせまくほーぬ請ひば道節も小文吾も。ふの忠心と感ぐ。やくと絶ふの道程ふ

られば。這已牌過る時候稲村の城ふ参上て出仕の両家老辰相清澄ふ面謁て苛子崎の旅泊ふ。犬江親兵衛蜑崎照文が注進の事の趣並ふ使ふて加ふ来ふける照文の伴若黨直塚紀二六が情願まぬ漏さぬ具ふ許てその書を呈閲しければ辰相清澄倶ふ閲て三士の武功高運を只管ふ感て已まぬ是より先ふ義成主今朝も瀧田の老侯ふ近習小溪目とて昨日七犬士の許稟あ。那注進の義ふ就て這方へ斟酌の計ひる宜く下知あるくと。内意を示あるけ。そのとあるとあるるゆと今又最も詳る注進の書と三犬士の許ふ駿嘆て寔ふ姥雪代四郎。水陸両所の一大奇功ふ思ふ倍る掙ぬと。感ぬと大かるぐ既ふて辰相清澄い件の事の趣を義成主ふ申えあげてその旨を美ふ隨即道節小文五ふ仰のとと伺る。今番親兵衛十一郎が注進ふよて知召ふ往る日三河る苛子崎及蕃山ぬ賊難の折他仏並ふ姥雪代四郎が武功ふ比類るるふべ。開い必帰国の後ふ賞禄宜く御沙汰ふえ又十一郎が伴若黨直塚紀二六る主を扶けて。賊徒の頭領今純友査勘太を生拘りる義ふ開も具ふ聞食ふ。開ふ

異日十一郎ゞ宜く賞もべゞ者ゝ且紀二六ゞ情願の事。素是忠義の與ゑれども。御要の義ゆゑ進退他ゞ隨意さるべ。又奥郡より隷られる船宰領の事城主の下知ゆ依るとても。央船の事ゆゑ御沙汰ゆ及れぬ道。郎小文吾相計ひて賞錢を取せかゝべゝ。その元錢ゆ有司ゆ談し。數のごく受るべ。あの毛御前ゆ召よせられて。仰渡さるべけれども。事日今の急啓るれゞ仰を俟る所件の如。とゝと叮寧ゆ示されけり。是ゆより道郎小文吾ゆ俱ゆ言葉を稟。退て有司ゆ恁々と談まるゆ方僅下知あり。ゆゑれゞ有司們異議ゆ。財庫より。件の錢を出さゝ道節小文吾ゆ指示もゝ。且のゆゑ。那紀二六ゞ路費をゞ各ゆ賜ゆゑ那若黨ゆ取ねとゆゝるゆさせ。その金ゝも共ゆ道節小文吾ゆ遞與ゆゝかゞ二犬士ゆ這有司們ゞ職室ゆ隣ゆる一室ゆ退て。親兵衛と照文ゆ與ゆ報翰。と隣尾判官の兵頭と。ゆえる錦織機馬ゆ遣もゞ。謝書一通を書寫めて。然而直塚紀二六を召登。仰の趣を解示して。路費の金子と。犬江蜑崎們ゆ答る書簡一通を遞與ゆ。紀二六ゞ欽び受戴ゞて。ゆゝ過分くも思ひけるゞ造化ゆゝそゆゝれ。小可今番も特更ゆ去向ゝゝそ

ゞゞゆゝ既ゆ東人の宅眷ゆ告別して罷ゆゞゞ這回ゆ那両個の奴隷ゞゞ伴ゞて進退自由ゆ仕り。ゆゝ央船ゆ又ゝゝ乗ゝて先三河まゞ赴ゞてんゝの毛を饒ゝのゞゝと願へゞ二犬士領ゞて。亦和郎の隨意せよ。咱們も港口へ赴ゞて。船宰領們ゆ對面せゞ卒ゝ躰て身を起して。両三個の伴の奴隷ゆ錢を馳ゝ紀二六を招て。件の港口へ赴ゞゆ其頭ゆ守屋ありけれゆ奥郡より隷られる両個の船宰領を召登て。水路の所役を労ゞ且當館のゝ下知ゆより。永樂錢若干を賜ゆゝを宣示ゝ。則両個の船宰領ゆ青蚊各五貫文及船公と筒工五名へ各三貫文共ゆ二十五貫文并ゞ蒼緡ゆ申ゞ勝けゝを取まれゆ船宰領們ゆ合矣るゆゝ額ゞと働ゞ恩ゞと辞ゞ欽び涯り和ゆけり。登時又道節小文吾ゆ隣尾の兵頭錦織機馬へ與る謝書一通を船宰領ゆ遞與もゝゝゆゝ。鄙ゆ大江親兵衛蜑崎十一郎們ゞその地ゆ賊難の折隣尾殿の武德救危の援助ゆよりて。禍反て福ゆゝりけるゝゝ。當館聞食て秦晋今も舊交の不測ゆ虚かゞりゝと感ゝ思召さゝゝ況我毎の欽び知るべ。因て錦織生ゆ謝書一通を寄ゝく欲もゝの意ゝ宜く偽れかゝ。又直塚

紀二六ゐ。ホ推返し西ホ赴く。主の伴ホ達まく欲を因て亦復便船を。三河まで乞んと願ふ。ゐ
ニび載らべ。とふと船宰領ども。うち听て仰ゐるひゑ在処ハ能ゐホ今日ハ。究竟の風ゐれと剛
才笠高工ども。呼ハもいへ。船を出ホ便宜ゑ身の暇とゆるべ。と答て舳八公と笠高工毎ゑ。両三個召
よせ。這刀祢ども。辛苦銭ホ是賜ゆと指示せハ。大家欽び拜謝して。銭を受金て退る程ホ紀
二六ゐ道節小文吾ゐ欽びと舒別を告て。船宰領ども共侶ホ。躍て船ゑ乗ゐける。ホ程ホ大
山道節犬田小文吾ハ伴當と招て。港口より又稲村の城ホまゐて。東荒川両家老ホ仰ゐ従ひ
ゐ。そ相計ひる件の趣箇様〻〻と。ゆえ上て退らんとゐる程ホ義成主ゆゑひて召よせて對
面ゐ。代四郎ゑ大功。親兵衛並ホ照文ゑ。高運の事の顛末ゐ具ホ听んとそ。面談ゐ時移
ゆべ二天士ゐの夜ハ主僕倶ホ當城内ホ留られて。次の日瀧田へかゐけり。話分両頭然ハ又三河
国渥美郡奥郡の城主隣尾伊近の判官ハ大江親兵衛蛍崎照文姥雪代四郎ども武
勇の梓ハ。或ハ討捕ゐ或ハ生拘る。海賊の頭領海龍王脩羅五郎今絶友査勘太及

伊近の隊ホ搦捕ゐ。小嘍囉ゑ。都て獄舎ホ繋ホ。尚支黨ゑ穿殿金ゐ。拷問堅ホ。か
ゆけれハ他ども近曽西國四國の舊巣破れて。脱れ来ホける海賊ゑ。其隊六十餘名の外ホ支黨
ゐ。と首伏ゑ。ホ。ゐホ討捕ゐと搦捕ゐと。都て五十八名ゐ。五六賊の往方知れ。是ゆ
伊近下知て。又緝捕使を処々ハ出て。隈もゐく渉猟らまゐホ苛子崎の波打際ホ。ゆち揚られる
五六個の屍。ありけり。件の緝捕使ハ。を検まゐホ身ホ傷ゐるも。痍ゐゑもゑの面框凡庸ゐで。
咸悪相ゐけれハ。暇兵ホ水死の首を斫りて。携還ゐ。獄舎ゐる。衆賊ホ。ゐて。他ども火家ホ
あ。ぶゆと。問ゐる。那水冤鬼柄杓九郎灘渡破船二ども。これをそ。ゐる皆海龍王ゐ
下の小嘍囉ゐ。初那勇少年ホ。毅ゑ悩されて。海ハ放下され者毎ゑ身ホ傷ゐるハ那折ホ品ホ
打中ゐるゐん痍ゐハ。就中泗法至妙の本事ゐる。小頭領でハ。ホ。ホ。免れず。て溺れハ。天罰ホ。
ありけん。とのひけり。ゐ。そ。ゐの海賊六十餘名數足りて。逃亡ゐる者ゐるけり。事分明ホ知れ。ゐ。伊
近則有司ホ下知て。査勘太並ホ生拘の衆賊ゑ。悉誅戮ゐ。脩羅五郎以下の首級を共ホ。

文溪堂蔵

苛子崎ゝ鼻さそ。且その申明牌ゝ海賊餘波ゝ。かくの如くゝ刑せられゝ今ゝ渡海者ゝ。べゝと寫
ゝて遠近ゝ示ゝ。土民們のゝゝゝ西海東海の艇公等高工們船ゝ這処ゝ寄せて眼前ゝ
視るゝゝゝ。ゝゝ是ゝゝて。俱ゝ安堵の思ひを做して苛子崎ゝ碇ゝ宿ゝ泊船漸次ゝ
くゝゝ當郡の民這濱邊ゝ家ゝ伴り店ゝ開く客店ゝ酒肆ゝ。經紀兒並て這里ゝ
聚合て。敏系昌せそとゝ者ゝ。昔ゝ易らゝゝゝ領主隣尾氏欽びてゝ地方の福也縁故ゝ
推きゝ那里見の三男士犬江蛍崎姥雪們逸早く海賊の頭領ゝ或ゝ首斬ゝ或生拘
ゝゝ。ゝゝ衆賊越ゝの根ゝ断ゝ有ゝ。ゝれゝ那大功武德ゝ後世ゝ貽さんゝ。當年五山の学僧の
渥美の某甲院ゝ流寓て在りけゝ課て剿盜の碑銘ゝ為ゝ最大ゝゝ石ゝ勒して。苛子崎ゝ
建ゝ。有ゝ而百年許歴ゝ程ゝ有一年洪波ゝ打倒されて碑海ゝ落没しゝ。人ゝ惜ゝ
ゝと云ゝ。是後の話ゝ且説ゝ日安房の稲村近ゝ港ゝゝ直塚紀二六を復載ゝ。既ゝ歸
帆ゝ既ゝ。ゝ奥郡の夷船ゝ這回も波上ゝ安らゝゝけれゝ両三日の程ゝて。舊浦邊ゝゝ

登時件の船宰領們。紀二六を伴て奥郡の城内ゝ。當家の兵頭錦織機馬の宿所ゝ赴く。
安房ゝゝ歸着のゝゝ想ゝ。且大山道節犬田小文五ゝ連署の謝書を呈覽ゝ。語次ゝ又ゝ
ゝ。小可們那里ゝゝ。船ゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

隷ふ送られて件の浦邊ふ赴く折先機馬ふうち向ひて城主の洪恩を拜謝し別を告て退りてその船ふ
うち乗るふ城主の下知ある行客ゑれ船公笘高エさ同舫児さ皆紀二六を敬ひて船中毫も費用を
被ず現紀二六々主とおふ誠心あれば海神の宜慮ゑ稱ひけん猛風劇波の憂いわで約莫一旬
有餘の程ふその船ふ乗く津國ゑる尼之崎ゑ果ゑける休題再説大江親兵衛蜑崎照文仁渡
海の船い儛ふ苛子崎を出より日毎ふ順風ゑりしかば水路の滝留稀ゑてその秋八月の中旬ふ浪速ふ届
るとゑるて猶權且船ふ在り先代四郎を遣して京師の光景を探まるふ曩ふ大飼現八が解示ゑしい
崖略ゑ最詳ふ知れるゑその事の顛末を親兵衛熟ゑうち听くふ前將軍義政公辭職の後も風
流の驕奢ふ錢を抛ち財を竭して民の怨訴をそしりあるゑ況治世四十餘年の程國乱れ民苦るを
屑とも思ひあるゑ僅ふ五年の間ふ九ケ度の大祓大饗食をえ行れる就中八幡春日両所の御社
参伊勢御参宮花の御幸河原の猿樂ゑなど遊興の費も亦ヨそ是ゑふ民の歎ゑるふ花の御
所の大造営ふ土木の工を起されしより萬民の費りくるゑゑ珠玉を磨ゑ金銀を鏤やる費の價ゑ

六万緡い錢六千貫文ゑこれを額一貫文ゑ小判一両ふ換ゑる四相ゑ古法ふ據れば金六千両ゑ
べ下の二万錢い二千貫文ゑこれ亦金ゑて二千両當れ屋と障ず優ゑふ過ゑ者ヨ費の甚ゑゑと知るふ足れり

慮六萬緡及義政のゑ母と御墓所の宏與ふ高倉の御所を造らせゆしよ腰障子一間の價二
萬錢ゑその嚴美壮觀萬民の財貨を絞りて飽まで ふ集てゑ徒の人工を盡させたる餘日是を
知るゑ花の。然い義政の不德かゑのごく只者傍を旨とて反く政事ふ荒ゑゆしゑ威權逐ふ管
領三職七頭ふ推得りて宗全勝元の内乱起れり是を応仁の擾乱とゑふその殃危の根本い初義
政ゑ子ゑるりしかゑ御舎弟今出川殿 視 ふ遠俗と蔑ゑまゑ世養嗣ゑるべ。と振言約ゑりしゑゑ
後御墓所の宏腹ふ義尚誕生まるしけれい義政のゑ志始ゑ似ざりけり況御墓所の宏歎ゑる方
ゑるりしゑ有一日事の叙次ゑとて悄地ふ山名宗全ふ憑せゆゑりしけれ宗全異議ゑく兼まりて
いくゑ今出川殿と退けて必ず幼君を立まゑ世ゑ出ゑ世ゑ出ゑ世ゑ出

不和ふるるの比又斯波畠山兩管領も家督爭ひのあるて各墻を鬩ぐ。初畠山政長と勝元貞と肩をならべ宗全も方人をふ勝元と不和ふるるを及びて宗全と又畠山義就ふ荷擔あるいくぐ。これを立んとも又斯波の爭ひも義政公の沙汰とて義敏と退け義廉を立めり。起るを小程ふ勝元宗全が御臺所ふ獲れまゐらせて幼君義尚と立たてまつらんと欲するを俗ふ勝元の奉出川殿義政の弟義視を立んとも左右を程ふ畠山政長と義就と開戰都下ふ起りて勝元も亦ヨリ勢をもて政長を帮助け宗全も義就を數せずして大軍を起すを見て眉の上を所親の人々東西ふ立つれ開戰已とるるを見て洛中這兵燹ふ焼亡れて萬民四方ふ離散をけり這兵乱初義就政長が家督爭ひふ事起りて遂ふ勝元宗全の爭ひの端を發せり又義視義尚叔姪の爭ひふ成りふけり有徳れば義政約ふ背いていくぐ義視を退けて義尚を立んと思食る僻事の至るを斯波義敏も養嗣を後ふ実子松王丸生れが初の志を轉じふ又勝元も亦畠山も養子を立る後ふ実子出来りて俱ふその家乱をとりけり然り將軍家も三管領も皆是世嗣の

るふ依れり。刻亦山名宗全伊勢貞親が時の權勢ふ乗じて或人の家を扶け或人を傾けたるる僻心是も亦相似たり。是ふ人の世嗣たり大事なるのいま一昔北條義時が頼朝の後を絶えて近く南北両朝の爭ひも皆是世嗣のるふ起りて天の下の天乱ふ做れりけり。そ歳ふ做まべ。と或学究ふ嗟ぜるき然ふ心仁元年ふ這大乱起りて十餘年及びて文明五年ふ宗全勝元うち續いて世を去りけれども猶その無ふ諸國ふ戰ひ休まず前後十一ヶ年とふ文明九年ふ宗全勝元の餘當黨戰ひ疲れて壁言が野燎のごとくふ滅てるごとく做まるが如く干戈を藏く理りて萬民安堵の思ひ做しぬ是より先ふ文明五年冬十二月義尚童年九歳ふ征夷將軍正五位下左中將ふ做りぬ政長畠山政元細川河管領と義視と美濃へ赴いて土岐成頼と憑まと在けり是より爭ひの路絶て世間静悄るるめり諸國の大名ヨリ敬ひて又將軍の命令ふ從ひ各力征割据を。世ふ戰國ふ做りけり。偖而文明十一年冬十一月義尚十五歳ふ。判始評定始あり。是より先ふ身自為政めひしが義政ふ東山る。東求堂ふ御座して。きく茶事ふ耽りぬ。光

度も懲らめで。古器古物を弄び。奇石名花を愛く。泉へ北山なる金閣に擬へて。茲に銀閣と造らゝ。四十四歳なる。その費もヨクなれば。財用のゝ窮乏を。武功ある諸士に賞さるゝ由なし。その故ゝ刀剣の價を定め。开を人々に賜りそのて加恩の地に代られけり。是ゝて義政。東山殿と稱する。その生涯の過奢放逸かくの如くなれども。尚幸なるは義尚将軍少年にして賢良の性なれば。弓馬に家業を怠らず。文学をも嗜むべし。書法も習ひて拙からず。是をもて小槻宿禰雅久に論語を講せ。また。その長を。ヨリ琴に。又ト部美保に日本紀を講せ。尚古の思ひ浅からぬ。年僅に十一なりける。秋七月一條の太閤に請ひて。樵談治要を撰ませ。政事の資助に。また。ひけり。然ばに折々詩歌の會を興行あり。又室町花の御所の庭前を。犬追物を奏する。屡々なるを。人々ぞ。その君治世久しくして。足利家の中興疑ひなるべし。と世人思ひなれども。惜むべし。乱世に生れ。ひとり。将軍のみならず。隨意為政ゆゑ。且父東山殿の年来奢侵の費ヨリ。ふと勝元宗全ら毎の兵乱十一ケ年に及び。間に公家武家倶に衰へて。京師の像く

文政堂蔵

さらぬ。當日飯尾彦六左衛門が歌に。

みやこ人野邊の舞雲雀のぞるゝ花に落る涙ぞと。詠るとそ。然とそ想像るべし。有低れば朝廷の御料も。年来闕乏あるべし。摂家槐門と稱せども困窮至極なるべし。その時勤王忠義の人ヨリ。錢財を調ずれば。必例外の勸賞あるべし。所願ある者願ひ稟さば。勅許疑ひなるべし。と世の風聲に。代四郎詳に探ゆく。浪速の浦かゝる事。然而件の事の顛末を。親兵衛と照文に其を報ると。半响許。親兵衛これを聞て。小らんの事成るべし。今管領の威福あるに。孰るぞ知ずやと。問ば代四郎然いひ。政元主は故管領勝元主の子なるとして。亡父の遺福より。第一の權臣に。願事その人に依られば成ると。一人みなの又畠山政長主に。勝元主の女壻なるに。応仁以来の兵乱に。那邦助と。竟に管領に補せられば。權威政元主に及べくもなく。同席に列るの門人にも異なるべとぞ。なるべとて。親兵衛點頭て。然ば京師へいそぐんとそ。一千十數両の白銀と。土宜を分ちて。七八箇の長櫃と。二十個許の夫役に。早くその餘の夫役と。十個の野兵ら代四郎と。倶に船に留めて。

度ゐ懲らめで。古器古物を弄び。奇石名花を愛く。衰へ北山なる金閣に擬へて。茲に銀閣を造らゐ。四十四歳なる。その費もヨクなれば。財用のゆく窮えを。武功ある諸士に。賞さるゐ由なし。その故ゐ刀剣の價を定め。开を人々ゐ賜りそのて加恩の地ゐ代られけり。是ゆゑ義政。東山殿と稱ゐる。その生涯の過奢放逸かくの如くなるけれども。尚幸なるは義尚将軍。少年ゐして賢良の性。文武の弓馬に家業を。怠らゐ。文学を愛き。書法も習ひて拙からず。是をもて小槻宿禰雅久ゐ論語を講せ。また。その長を。ヨリ。又ト部美保ゐ日本紀を講せ。尚古の思ひ浅からぬ。年僅ゐ十一なりける秋七月一條の太閤ゐ請ゐて。樵談治要を撰まゐて。政事の資助ゐ。また。ひけり。然ゐ折々詩歌の會を。興行ゐ。又室町花の御所の庭前に。大追物を。興ゐ。屋。なりと。ゆゑ。この君治世久しくして。足利家の中興疑ひなるべしと。世人思ひなられども。惜むべし。乱世ゐ生れ。ゆゑ。将軍のそなたもとゐ。隨意為政ゆゑ。且は父東山殿の年来奢侵ゐ費ヨリ。ゐと。勝元宗全ゐ。毎の兵乱十一ゐ年ゐ及び。間ゐ公家武家倶ゐ衰へ。京師ゐ京師の像く

水六郎左衛門尉が歌ゐ。みやこ野鳥辺の舞雲雀のぞるゐはけて落る涙ゐと詠るとゆ。然ゐそと想像ゐ。有係れば朝廷の御料ゐ。年来闕乏ゐ。摂家槐門と稱せども困窮至極ゐ。ゐの時勤王忠義の士ヨリ。錢財を調ゐ。必例外勸賞ゐ。願ゐ者願ゐ稱ゐ。勅許疑ひなるべしと。世の風聲を。代四郎詳ゐ探ゐ。浪速の浦ゐ。然而件の事の顛末を。親兵衛と照文ゐ。報ると。半晌許。親兵衛これを。うち聞て。分らぬゐ事成るべし。今管領の威福ゐ。孰るゐ知ゐ者やと。問へば代四郎然ゐ。政元主ゐ故管領勝元主の子なるとして。亡父の遺福ゐ。第一の權臣。願事ゐ人ゐ依られば成るとゐ。人ゐ。又畠山政長主ゐ。勝元主の女壻なるゐ。応仁以来の兵乱ゐ。那邦助を。竟ゐ管領ゐ補せ。れば。權威政元主ゐ及べ。ゐ。ゐ。ゐ

尚もヨカラン。貫金の守衛とて。却次の日の早天より。親兵衛と照文は件の長樫を早る。夫役们を先ま立て。各伴當を率て京師に赴く。管領政元の邸に伺候して。その家の冢宰なりける。香西復六に就て来意を演。且主君義成の呈書と。白銀五百両と。上宜幾種。欵都て目録と共に遞與したれば。復六異議なく受納て。退りて主君政元に披露す。姑且して又出て来て。親兵衛ふたり向て。里見殿の御書並に寡君左京兆政元さに贈り来られ。件々と。随即披露仕のれば。異日將軍家。言上に及ぶべし。旅亭に退りて。ちと沙汰を。留まるべしと。命せられしに。抑旅舎は那里ぞや。と問へば。親兵衛うち聴て。安房より水路を。来たれば。船に歇て。浪速の浦に在りしまゝ。旅亭にいたりとは。答に。復六領ぜしかば。咱們案内をまべ。箇様々々の処に。究竟の客店あり。調貢の貨財。ヨカラン。ばければ。是ゆて。進退して。ゆゑと。誨て。木牌を。遞與せまゝ。親兵衛に。照文と共に。伴に。欵びて。演辭。去て。躰て。畠山政長の邸に赴く。又来意を告て。東西を進らすると。都て。始に異なる。有徳而親兵衛に。香西復六の指揮に依り。三條頭に。歇店と。定めその詰朝。両三個の伴當と。夫役と。浪速津なる。船に。還て。とりて。代四郎に。告ること。代四郎。欵びて。准備して。又其次の早天に。貢獻の韓樫。茜固と。巻絹。土宜なんどを。居ヨの夫役に。早く。陸續として。京師へ。赴く。宰領の雑色。十個の。雇兵。加旃。管領の木牌。あれば。人々の路を。讓られ。是より。浪速の浦なる。歇船。西三個の。奴隷と。艇公。笞。高工。オに。残置れけり。徒而。焼雪代四郎。連の。路次。といそぐて。下浦に。親兵衛の。旅宿に。来たれば。親兵衛は照文と。倶に。端近く。出迎へて。貢献の韓樫。その餘の東西。咸貨。坐席の上座に。舁入れ。積並べ。日夜の小心。困るべ。徒て。又親兵衛。代四郎。とも。香西の宿所へ。使に。遣して。案内に。依て。三條に。旅宿を。定めるよりと。浪速の船より。東西。悉く。含来て。趣を。告て。欵びの心ざしに。贈代の黄白。一裏を。贈りて。異日。官府の。沙汰。おろそかに。折のまでもと。叮嚀に。溝心けり。小程は。管領。左京大夫。細河政元。次の日。室町花の御所に。出仕して。左衛門督。畠山政長に。里見安房守。義成の。使者。大江親兵衛。仁並に。蜑崎十二郎。照文と。喚。做せ者們。安房より。昨日。到来して。まゝ。せる書。劇の趣。箇様箇様と。解示して。且その書。を。ひらき。共。侶に。將軍。義尚。公に。ゆえ。ゆゑ。義尚。件の。呈書。を。ひらき。先

両管領の意見を問ふに政元答へ禀ずるに義成東隅の公藩屏として敢千里の遠路を辭せず貢進の礼儀まで不淳の忠信の致す所願ひ禀を姓氏の義を奏聞あらんやと萬禀其領ず然れども
その趣を東山殿へ禀上せんと伺ふべしとの義に左衛門督あるべきよと仰せ政長兼ねて退て東山へ赴いて義政公に里見の一條箇様々々と申入て其書を御覽に入れ義政合点の余り兵乱の
後財用足らず公武倶に不如意なるに料らも帮助を乞る報ひなくんば例の有無姑閣して奏聞
勿論なるべし他事なく仰含めらるる政長美り四能りかくて義尚公に恁々と件の返命を禀ずるに再
議に及ぶべきと即便里見義成の奏請の事の顛末その家臣八個の大某々の氏と金碗と更に賜
らんと願ひなるよし具に奏聞せられけり是に於て當朝の諸司百寮事の可否を詮議あり或らく古
より氏を改めと請なる者勅許の例あるといへども他々の里見の陪臣たるべきと議するもあり或い又
他々の陪臣たるべき義成の父義実の外姪たるに必由緒ある兵毎々むる年々御領閑之と朝政
行事廢れんとせるの義勅許なりせば所の貢物をも退けられ狹了簡なるに於ては議論の関白

殿听ゆるして時に盛衰あり事に用捨あり八大陪臣たるとも他々の願ひなるに於ては其の主里見義
成の請禀を将軍奏聞せられ然れば勅許ありとても氏を陪臣に賜ふあらば迺義成に賜るを
義成受なりて八大士に授るとの事に條理ありて超級諸上の傍議なるべしと仰諭させられ
衆議遂に一決して主上に奏聞あなり躬て義尚將軍に勅詔ありて宣旨を成し下されけるその
書に曰く

文明十五年八月二十五日宣旨

右肩に細書して上卿矢木原□納言

実に朝臣外姪安房守兼上總介源義成朝臣家臣大江親兵衛仁大塚信乃成孝大山道
節忠與大阪毛野嵐智大川莊介義仕大村大角礼儀大飼現八信道大田小文吾悌順
右八箇勇士依義成朝臣之奉乞宜為金碗氏因賜姓宿祢。　藏人右少辨藤原
朝臣秋豊奉。　とあるその美秋豊朝臣より室町殿へ執達禀をなせば。恁而又その次旨に改
元奉ず親兵衛と照文を郎へ召よせて對面あり姓氏のあり既に勅許の御沙汰ありて明日両管領
東山へ召させる。辰牌時候参上して見参に入りなるべしの餘のるに恁々なるに香西復六談ず

花御所
仁照文
義尚公
拜見を

べーと宣示さるその後又別席ゆて香西復六面談して宮中の本日は衣裳進退と詳ふ指南あり首尾最好とぞ祝しける。偖而二十七日の朝夙ふ大江親兵衛蜜崎照文ら俱ふ公服と整へて安房より商ゆるるの日晋上の韓樞と居ヨの吏役ふ舁しく姥雪代四郎以下の伴當と十個の賜兵宰領の雑色と相俱して花の御所へ赴くふ吏役い都て縹無ふ白く龍膽勝草と添做る一様の半臂ゆて敢漫語せず齊々として徐ろく光景田舎児ふ稀へと看者歩を住めけり偖而親兵衛と照文い花の御所る四脚門ら找ミ入りて参上のよりと亘示あらば當今番の青侍遠侍へ案内ゆて各對面あるの程ふ既ふ時分ふるるーゑ将軍義尚公正聽ふ出ずして儲の裃児ふ着のべ両管領政元政長と首ゆて有司い御前る左右二側ふ羅列し近習い次後ふ従ひなすの次ん佩刀及翠簾の役あり登時親兵衛と照文い次ん亘前へ召出さる烏帽子の櫛緒副ゆる素襖の袖と重ゆて迫ふ拝見あられれば有司い安房ら晋上の目録と披露ふなり。政元則仰を伺へて宣旨と御教書と親兵衛ふ渡し賜ふ。當今並ふ三宮へ貢献の件々い明日参内ゆて。獻

ゑべーと仰らるるの折親兵衛ら進止亀も礼儀と失ふ熟ふる者の如くゑと當席ふ有司感心して當青々あるに少年ゆるる大事の使ふ遣られい必是覚あ功着ゆるべーと思ふ偖而見参の式果りて親兵衛い晋上の件々と都て有司ふ相渡して退そ照文と共侶ふ東山殿詣て又王君晋上の東西へ進ゆると立則ふ同ふ且見参の式の餘のゆも室町殿ふ異ゆるるにれば言畧て具ふせべその翌朝親兵衛い政元ふ倶せられて参内あて階下ふ朝恩と拝しゆる宣ふ冥加あるるるるよゑ面目と思ふ既ふて拝あ記て朝貢の件々と收斂所へ帰ふて退出て照文と共侶ふ撰ふ録槐門漏もとゆる。参上ら君命と舁て東西へまあらまると差ら然而ふの帰路ふ両管領の邸ふ赴ふ恩と謝して帰園の暇と賜ふと思ひ禍薬墻の下ふ起りて政元敢其気を飲えさべ畢親兵衛をゆ抑留ゆて久しくるまで還さりける故ふ亦ら甚麼ゑゆ分教あり。雲長在厄豈ゑ心漢。千里獨行虚五關。五さの仇いのゆるから園の虎と搏ゆり日本ゆ夫。這詩歌の意と知まく欲せべ巻と更へ下の回ふ解分ると聴ねか。

南總里見八犬傳第九輯 巻二十三 終

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙中画工筆畊剖刻目次

出像畫工　柳川重信

淨書筆工　谷金川

彫工　横田守
　　森田某
　　櫻木藤吉

巻十九廿一
巻二十廿五
巻二十二

南總里見八犬傳　第九輯下帙

第一輯より第九輯下帙の上まで大凡六十二巻年々刊行されたれども下帙の中五巻六の度出板すべく第百三十六回より下の本稿の巻數のまゝ詳らかなれども五六巻ゆゑ結局大團圓まで來戌冬月發販遅滞す

近世説美少年録　第一輯より三輯まで曩に刊行してより年々揭出しいま第四輯五輯も各五巻八冊結局の後推つゞき出板遠くゆゑ

開巻驚奇俠客傳　第一集より第四集まで二十巻先年既に刊行あるも第五集四十回以下八冊圏口の後作者必稿を続ぐゆゑ○第五集五巻近刻

莊蝶翁再遊外紀　夢想兵衛蝴蝶物語の一書前後二編今ゑに世に行はれ因て曲亭翁ふたゝび又その編を刊布せまく欲す○第一集五巻近刻

著作堂一夕話　その書翁の隨筆なれども世俗に鮮し易からざれば行はるゝ事廣からぬを因て通俗を旨とせんと必稗益多ゑ侯下○大本五巻近刻

右曲亭翁新舊著編の畧目也皆本房の藏板なるゆゑ餘るかゝるべし　江戸書林　文溪堂敬誌

玄同放言第三集　初集二輯共に大本六冊先年両度に賣出し今以ゆゑに世に行はれし第三集大本三冊近刻九十二冊ゆゑ全部ゑるべし

玄同曲亭翁の別号なゆゑの板客歳本房に購得て藏板せり製本已前より格別念入れ速に賣出しし処初度にうるゆゑ行はれし太平太喜のあまり猶又第三集以下は翁の稿本なゆゑ求め右の書名をあらかじめ一夕話と共に刊行可仕候並に八犬傳結局大團圓まで明年全部仕ゆゑ並製表本の外に雁皮紙摺り合本箱入に仕候もの好みに任せ賣出し申候並製表本右合本なれども追々に求め所望の方仕て希ひそまゝ仕候　文溪堂又伏壹示

江戸書林八犬傳板元

○家傳神女湯　妙人ちのくすり　法病の妙やく　一包代百文

○精製奇應丸　大包代金弐朱　中包代弐朱　小包代五分

○熊胆黒丸子　一包代五分

○婦人の虫の妙薬　一包六十四文

製薬所　元麻田町中坂下南側四方みそ店の向　瀧澤氏

○御茶わかるゝ仙女香　一包四十八文　黒油美玄香　一包四十八文　江戸京橋南傳馬町三丁目中程坂本氏

天保九年戊戌春正月吉日發行

大阪心齋橋筋博勞町　河内屋長兵衛

同所　河内屋茂兵衛

書行

同　江戸小傳馬町三丁目　丁子屋平兵衛板